

授業科目 臨床薬理学特論	科目概要・形式 2単位 30時間	配当年次 1年 前期
科目責任者	斉藤弘子	
担当者	斉藤弘子、中村郁子、鳴井ひろみ	
<p><b>1. 科目のねらい・目標</b></p> <p>臨床の場で用いられる薬剤（緊急応急処置、症状調整、慢性疾患管理に必要な薬剤）を中心に、薬理学の基礎知識を習得し、薬物療法が必要な患者に対する生活調整、回復力の促進、患者の服薬管理能力の向上を図るためのケアや薬剤使用の判断、投与後の患者のモニタリングなどを実践できる能力を身につける。</p> <p>&lt;到達目標&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 臨床薬理の基礎知識を説明できる。</li> <li>2) 薬物の動態・副作用・相互作用について説明できる。</li> <li>3) 基礎的な疾患・病態における薬物治療の根拠を説明できる。</li> <li>4) 代表的な薬剤についての投与方法、投与後のモニタリング、症状管理、服薬管理、服薬指導について説明できる。</li> <li>5) 薬物療法を受ける患者への看護援助の意義および方法を考察できる。</li> </ol>		
<p><b>2. 授業計画・内容</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1回目：臨床薬理学の基礎知識および薬物の作用機序（体内動態・投与経路）（中村）</li> <li>2回目：薬物の作用・副作用・相互作用（中村）</li> <li>3回目：対象別（妊婦、小児、高齢者）の薬物の体内動態、薬効の個人差（中村）</li> <li>4回目：循環器系に作用する薬物（中村） 循環器系の構造・機能と代表的な抗高血圧症薬、抗狭心症薬、抗不整脈薬、心不全治療薬の作用について学ぶ。</li> <li>5回目：呼吸器系・消化器系に作用する薬物（斉藤） 呼吸器系・消化器系の構造・機能を学び、代表的な気管支喘息治療薬、鎮咳薬、消化性潰瘍、便秘および下痢、嘔吐に対する治療薬の作用を学ぶ。</li> <li>6回目：内分泌系・代謝系に作用する薬物（斉藤） 糖尿病、脂質代謝および脂質異常症の概略と代表的な治療薬の作用について学ぶ。</li> <li>7回目：中枢神経系に作用する薬物（斉藤） 中枢神経系の構造・機能を学び、代表的な麻酔薬、催眠薬、てんかん治療薬の作用について学ぶ。</li> <li>8回目：炎症、感染症に用いられる治療薬（斉藤） 抗菌薬の適正使用について、薬剤選択、耐性菌対策、体内動態、薬効、毒性などについて学ぶ。</li> <li>9回目：疼痛緩和、精神安定に用いられる治療薬（斉藤） がん性疼痛、頭痛、腹痛の治療薬の作用や向精神薬の作用について学ぶ。</li> <li>10回目：救急時に用いられる治療薬（中村） 救急時に使用される薬剤について、循環改善のための薬剤、ステロイド剤、輸液製剤・血液製剤などの作用について学ぶ。</li> <li>11回目：薬剤の安全性（中村） 薬剤を適切に使用するための添付文書の読み方および活用法について学ぶ。また、薬事法や薬害・医療過誤について学ぶ。</li> <li>12回目：がん化学療法を受ける患者の症状マネジメントと安全な薬物管理（斉藤） がん化学療法の実際と代表的な副作用の症状のマネジメントについて学ぶ。また、安全な抗がん剤の取り扱いについて学ぶ。</li> <li>13回目：小児看護における薬物療法、生活調整、服薬管理について（中村） 小児の発達段階に応じた薬物動態の特徴を理解し、薬物療法に伴う生活調整、服薬管理について学ぶ。</li> <li>14回目～15回目：自分たちの専門領域で用いる代表的な薬剤を取り上げ、その薬剤を使用している患者の看護援助を検討し、発表する。（鳴井）</li> </ol>		
<p><b>3. 教科書、参考書</b> 適宜、提示する。</p>		
<p><b>4. 成績評価方法</b> プレゼンテーション、課題レポートを通し、総合的に評価する。</p>		
<p><b>5. 受講要件</b> なし、がん看護専門看護師コースの学生は必修</p>		
<p><b>6. 社会人学生に対する配慮</b> 相談があれば個別に対応する。</p>		
<p><b>7. その他</b></p>		